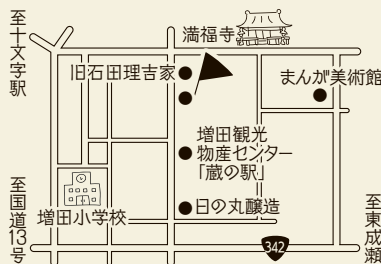




さまざまなストーリーを秘めた  
地域の街角を探访します。



佐藤こんぶ店のペコちゃん「横手市増田町」

# 年代、サイズ多様 300体がお出迎え



店に一歩足を踏み入れた瞬間、舌をチヨロつと出した大小300体ものペコちゃん人形が出迎える。そこは、重厚な内蔵を収めた明治から昭和初期にかけての商店や民家が建ち並ぶ横手市増田町の七日町・中町通りに面した佐藤こんぶ店。

国の重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)に指定され、国内外の観光客が増え続ける同地区にあってペコちゃん人形の注目度も高い。訪れた人々は一様に「えっえー」などの驚きのリアクションを見せ、次第に「かわいー」とか「譲ってくれませんか」とかと言葉を継ぐのだそう。

意表を突くこんぶ店のペコちゃん は、全て2010年に69歳で亡くなった2代目店主・佐藤正一さんが収集した。

「60年ほど前に嫁いできた時には既に多くのペコちゃん人形がありました」と語るの正一さんの妻の美喜子さん(81)。

不二家のホームページ(HP)によれば、ペコちゃんは1950年に同社のマスコットキャラクターとして誕生した。店にはおなじみのオーバーオーの裾に「ペコちゃん」と記された初期型のちよつとバタ臭い表情の人形

はにこやかに振り返る。「こんなにたくさんあるのに、夫は孫にさえ1体もあげようとはしませんでした。ただ、私は夫に内緒でほしい近所の子どもたちに何体かあげちゃいましたけど」と美喜子さんは舌を出す。

内蔵の所有者らでつくる「増田蔵の会」や増田まちなみ保存会の役員も務める丈浩さんは「重伝建地区の魅力アップのため、各店舗がお宝を紹介する1店1宝運動を展開している県外の地域もあります。うちのペコちゃんもそうした存在になれるよう今後ちよつとした解説などを添えていきたいと思っています」と語る。

も複数展示されており、正一さんの収集歴の長さがうかがえる。

こんぶ店  
以前から乾燥ゼンマイ販売や和服の古着屋などの商売を営み、販売や仕入れで大阪に出張するたび正一さんのコレクションが増えていったといい、長男の会社員・丈浩さん(56)によれば「蔵の中には箱に入ったまま手つかずのペコちゃん人形がまだ数百体あります」とのこと。

蔵に眠っていたペコちゃんが目の見たのは2000年頃。秋田ふるさと村のイベントで一部を展示したところ評判となり、家族もその素晴らしさに感心し店舗に飾るようになった。

「記憶の中に蔵の中でペコちゃんに見入っていた父の姿が浮かびます。職人気質の父が愛らしい表情に癒やしを求めたのでしょうか。数は少ないながら銀行や製薬会社のマスコット人形も集めていました。ひよつとすると、今でいうキャラクターオタクだったのかも知れませんね」と丈浩さん

74年前に生まれた「永遠の6歳」(不二家HP)のペコちゃんは、歴史的街並みでも変わらぬ人気者だ。



表情がちよつとバタ臭い1960年代初頭以前の初期型ペコちゃん

